HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Dierich Wiederkehr,Entwurf einer systematischen Christologie
Author(s)	荒木関, 巧
Citation	基督教学, 7, 33-37
Issue Date	1972-10-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46285
Type	other
File Information	7_33-37.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

書　評

Dietrich Wiederkehr

Entwurf einer systematischen Christologie

in : Mysterium Salutis III/1, Einsiedeln, Benzinger Verlag 1970, p. 477–648.

神学の綜合的展望を試みるものとして、Mysterium Salutis 三巻がある。神と人類との関係を救済史という視点から捉え、その頂点にキリストの復活秘義をおく。第三巻1、2、はキリストの出来事を子一人の業としてではなく、父の愛という三位一体的、聖霊論的働きとして、また人類歴史へのよびかけと応答として把握しようとしている。

ヴィデルケールはバルト、パンネンベルグ、ラーナーの労作を土台にして、従来の神性、人性というキリストの二本性説を守りながら、特に「父の子」を強調することによってキリスト論を展開する。かれは「ペルソナ」「関係」という面から人の子イエスが父の子であることを考察し、復活という歴史において父の子であることが証明されたとのべる。

神を慈愛深き父として理解し、イエスを、父の愛を豊かに受けた人類の一人、人の子として理解するのは困難ではない。このイエスが神の子であり、救世主であるということをどう理解したらよいか？

人間実存は与えることよりも受けるというところに特徴がある。不安、孤独に悩むとしても、他から受ける幸せ、喜びによって生きている。受容、他者による存在(esse ab alio)という特徴は恵みを招く肯定的、積極的なものである。この人間の受容的性格によって、イエスが神の子であることをヴィデルケールは解明する。イエスは「父からの生命」によって存在する。父から存在と生命を受けるのは受容的であるが、ダイナミックな愛の応答でもある。神の内的生命の交わりにおいて父から子へ生命が伝えられるならば、人間的体験においても存在を

伝え受けるという交わりの類比を考えることができる。

「子」とは存在を受けることである、子が時間、歴史において、すなわち被造的存在として生きるとき、かれは始めから完成された者としてではなく、完成へ向って歩むのである。かれの存在の完成はその終極点において明らかにされる。与えあい、受けあう「父の子」の関係は復活において決定的に明らかにされる。ここに人間実存の受容性と共に、その歴史性が神人キリストの理解のために重んじられていることがわかる。イエスは時間、歴史の中に置れた者である。かれは父から由来する子という実存（神の子）を、自由に基づく決断によって歴史の中に実現させていく。イエスの人間としての歴史とその成就がかれのペルソナを決定する。死によって人間的歴史の可能性と決断は終わる。歴史的、人間的な子としての由来性によって、神の子としての由来性が明らかにされるのである。

被造的、歴史的な人の子イエスが神なる父に対して持っていた関係と、三位一体内における父と子との関係との間に、「受ける」ことの類比が認められる。すなわち被造物として存在を受ける体験が時間の中で展開されていくのである。神の子が人間になるとは、歴史的なものになること、歴史化（Geschichtswerdung）である。神の子は人間本性の主体であり、それゆえ人間的歴史の主体なのである。

神の子が人間実存であるために歴史的な時熟（Zeitigung）を体験する。イエスは死という「時」の終わりによって、神の子になったともいえるのである。イエスが神の子であるという存在本質（Sohn-sein）は、子になる（Sohn-werden）という生成ときりはなすことができないのである。

イエスが子として存在、生命を受ける者であるならば、知性、意志においても同じ受容的性格を認めることができる。

三位一体内において子が父に聴き入り、その愛を受けいれていた交わりは、被造的実存イエスにおいて、時間、歴史のうちに聴きながら学び、自由意志によって決断するという形で具体化される。父との一致のためには信頼にみちて聴従することが前提される。復活前のイエスの

道は、完全な認識の伝えあいへ向かう歴史である。

人間の意志の場合、自己から(a se)というよりも他人による(ab alio)人間関係において決断がなされる。イエスもまた父との関係において意志決断がなされるのである。

復活において神の完全な支配（神の国）が実現する。この神の共同体は閉鎖的な独占社会ではなく、神の権能と支配とを子に伝え与える交わりにある。復活という完成点からイエスの道が父と子との間の意志の通じあいと一致へ向かう道であったことが理解されるのである。イエスの受けた誘惑、死の苦しみ、父にさえ捨てられたような絶望の状態も、父に対する子の道として理解され、神の内的、三位一体的生命の交わりの歴史的展開として認識されるのである。

ヴィデルケールはイエスの人間論から救済論をひきだす。イエスはその人間存在を神という存在根源から受けている。また「子」という由来性(Herkunft)を父なる神から与えられている。イエスが神に対して持っている関係と、世界に対して持っている関係とによって、かれの存在は救済意義を持ってくる。神から由来して世に向かうという二つの方向において、イエスは救済的機能を果たすのである。イエスの人間実存の実現化が、すべてのあがなわれた人間実存の根源となるのである。

イエスが神との親しい交わりを実現するならば、新しい真の人間とよぶことができる。罪深い被造物（人間）の場合、神との関係は全くなくなってしまったわけではないが、悪用され、無視されている。人間とその世界の救いがたい状態は神との交わりが破られているためである。人間実存そのものにこの救いがたい状態を見ることができる。

イエスは人間精神の超越性ゆえに神の啓示に対して開かれている。神の愛の問いかけに聴従し応答する。ここに人間実存の救いが明らかになる。イエスが神の子になったという出来事によって、すべての人が神の子らになるという可能性が与えられるのである。イエスは人類の一人である。かれは外部から人々を救うのではなく、内部から身がわりとなって人々を救う。救済的連帯性を持ち、人類と共に神の裁きの下に立ち、法の下にあるとら

われの身になり、死の支配下にある兄弟と同じ血肉になったのである。

イエスが人類と同じものになられたという場合、人間実存の肯定的な面をとりあげたのであって、罪という暗黒面もイエスが持っているという意味ではない。イエスは救済史の中に位置する人の子である。しかし罪の歴史の中に埋没してしまった者ではなく、復活によって罪の歴史を神の子らの歴史に変容させる者である。

神に対するイエスの関係は、この世からの、人間的なものだけからの努力の結晶ではない。復活によってイエスが神の子と決定的に宣言されるのは、イエスの誕生以前、すでに神の子であったため、神であったからである。イエスが世界と神に同時に属すのは神だからである。時間のうちに、イエスは死に至るまで従う者となったことによって、神の救済意志が実現する。この死によって子は父なる神の愛を自分のものとし、人々のものとする。

神のことば(ロゴス)は世に対する神のことばであるが、同時に神に対する世の終末論的なことばでもある。イエスにおいて神から世への愛の具現を見るが、同時に神に対する世の新しい愛の具現を見るのである。

イエスにおいて神の豊かさと世のみじめさを見ることができるのである。死に至るまで無となる(ケノーシス)体験を受け、同時に神の生命の充満(プレロマ)を受ける。無と充満という逆説的受容がイエスにおいて矛盾せずに調和し一致しているのである。神の生命の充満は復活においてのみでなく、そのへりくだりと死のうちにも輝いているのである。神の知意はイエスの権威あることばにおいてのみでなく、十字架の愚かさにおいてもあらわれされているのである。

救済論は「父と子」、「受容性」、「歴史性」という実存的、関係的概念によって説明され、復活へ向から人の子イエスの道は、神の子の道でもあることを生成と完成という動きのうちに理解されている。神性と人性という従来のスコラ神学の命題は、父なる神がご自身を与えるという下降的動きと、父なる神へ向かう史的イエスの自己超越の上昇的的動きとの一致として捉えなおされ、位格的一致とはこの二つの超越的飛躍の一致として説明されている。

ヴィデルケールは伝統的キリスト論を守り、しかもイ

エスという存在を三位一体と救済史との関連において新しく位置づけようとしているが、パンネンベルグのキリスト論（Wolfhart Pannenberg, Gründzüge der Christologie, Gütersloh, 1964）から多くのヒントを得ているように思われる。

（荒木関　巧）

昭和四十六年度行事報告

○第十回大会　七月十二日　於・北星学園大学

理事会

総会

昭和四十五年度行事、会計、会計監査報告

議題

一、公開講演会の件

二、次期大会の件

三、「基督教学」発行に関する件

総会決定事項

一、公開講演会は日本基督教学会第十九回大会（九月九・十日於・北大）の直後、来道した会員の中から二名に依頼し、北星短期大学において行なう。

二、次期大会は北海道大学において行なう。期日は七月十日とする。

三、「基督教学」第七号の編集委員は次の通りとする。

浅井正三、荒木関巧、宇野光雄、加藤邦雄、白井暢明、滝沢武人、土屋博、山崎保興、渡部光男

研究発表会

一、トマスの詩篇Vについて	北大大学院	滝沢武人
二、キェルケゴールに於ける第二倫理学の問題	酪農学園大	渡部光男
三、賀川豊彦に於ける終末思想	北星学園大	加藤邦雄
四、エレミア書第二章のCovenant-Ribの様式史研究	酪農学園大	菅沼英二

○公開講演会

都合により中止となる。

新入会員

井上昌保	酪農学園大	
木下順治	日本基督教会旭川教会	
秋田稔	北星学園大	
菅沼英二	酪農学園大	

執筆者紹介

菅沼英二	酪農学園大学助教授	
滝沢武人	北海道大学大学院	
荒木関巧	カトリック司祭	